

【書き下し文】

嘉祐は禹偁の子なり。嘉祐は平時は愚駿の若きも、寇準のみ之を知る。準開封府に知たりて、一日、嘉祐に問ひて曰はく、「外間準を議すること云何」と。嘉祐曰はく、「外人皆丈人且夕入りて相たらんと云ふ」と。準曰はく、「吾子に於いては意ふこと何如」と。嘉祐曰はく、「愚を以て之を見るに、丈人未だ相と為らざるに若かず。相と為れば則ち誉望損なはれん」と。準曰はく、「何の故ぞ」と。嘉祐曰はく、「古より賢相の能く功業を建て生民を沢す所以は、其の君臣相ひ得ること皆魚の水有るが如ければなり。故に言聴かれ計従はれ、而して功名俱に美なり。今丈人天下の重望を負ひ、相たれば則ち中外太平を以て責めん。丈人の明主に于けるや、能く魚の水有るが若きか。嘉祐の誉望の損なはれんことを恐るる所以なり」と。準喜び、起ちて其の手を執りて曰はく、「元之は文章は天下に冠たりと雖も、深識遠慮に至りては殆ど吾子に勝る能はざるなり」と。

【現代語訳】

嘉祐は禹偁の子である。嘉祐は普段は愚か者のようだが、寇準だけは彼の優秀さを知っている。寇準は開封府の知事を務めていて、ある日、嘉祐に尋ねて言うには、「世間は私のことをどのようになっているか」と。嘉祐が答えるには、「世間の人は皆、あなたがすぐに朝廷に入って宰相の位に就くだろうと噂する」と。寇準は「あなたはどう思うのか」と問うた。嘉祐が言うには、「私の思いでもってこのことを考えると、あなたはまだ宰相にならないのがよい。宰相となると名誉や人望が損なわれるだろう」と。寇準が「どうしてだ」と言った。嘉祐は「昔から賢い宰相が手柄を挙げ人々に恩恵を施すのは、その君主と家臣の関係が極めて良好であったからである。だから宰相の意見が皇帝に聞かれ、宰相の提案する策が皇帝に従われるのであって、それで功名は両者ともに良いのである。今あなたは天下の重い期待を背負い、宰相となると天下の太平を求めるだろう。あなたと皇帝の関係は、極めて良好なものになり得るか。これこそ私があなたの名誉や人望が損なわれるだろうと恐れる理由である」と。寇準は喜んで、立ち上がって嘉祐の手を取って言うには、「あなたの父上は文章は天下第一であったと言っても、深識遠慮に関しては、ほぼあなたに勝る能力はない」。